

万葉の川心

黄葉を詠める歌

横浜市立矢向小学校教諭 澤井園子

(巻第十一 二二二〇番歌)

明日香川 黄葉流る葛城の

山の木の葉は今し散るらむ

真夏の誰もいない教室で、一人床を磨いている。十分に熱せられた校舎の中で、時折くらくらしながら汚れを落としていく。学生の頃、「先生」とは黒板の前に立ち、子どもに勉強を教える仕事だと思っていた。いざなつてみると、子どもに教えられることばかりだし、書かなければならない書類の量は想像を遙かに超えていた。それから、教員が偉そうなことを言うよりも、ごみひとつ落ちていないきれいな教室を保つ方が、よっぽど子どもたちが落ち着くことも分かった。大人にも、夏の宿題が山盛りだ。頭を使う仕事はいつものように先延ばしにして、そこにはいない子どもを思いながらひたすらモップを動かす。担任している一年生の子どもたちは、きつと学校のことを忘れて、それぞれの夏を過ごしているだろう。自分を振り返っても、夏休み「先生」を思うのは、きまつて大量に出された宿題を恨めしく思う時だけであったのだ。

現代人の「見えないものを想像する力」は、古代の人に比べて、飛躍的に伸びたのだろうか。時折疑問に思う時がある。今は、画面上に立体的に見たことのないものが映し出される。そして、だいたいこんなものなのだと分かった気になってしまっている。万葉の頃、黄葉を歌う時、川に流れる様子を、見えない山の景色を想像する歌が多い。「明日香川に黄葉が流れている。

上流の葛城山の木の葉は、今、まさに散っているのだろう。」山だけでない。月が過ぎて、秋風が吹いて、物思いにふけていて知らぬ間に、時雨が降って、雁が鳴いて、夜明けの露に黄葉になっていることを思うのである。二一八四番歌ではこんな歌もある。「秋山の美しさを、人々よ、決して口にしな

いください。せつかく忘れていたその黄葉が思われてしまうから。」と。また、見ない人のために、「故郷の初黄葉を今日こそ手折って持つてきましてよ」という歌もある。巻十にある黄葉を詠める四十一首のうち、「紅葉」となっているのは一首だけで、あとは「黄葉」であるのも面白い。古代人は、緑、黄色、紅とそれぞれの美しい糸で織り上げた錦のように山を彩り、川を流れる黄葉を、存分に堪能したことであろう。

写真の歌碑は、大阪府南河内郡太子町大字山田の太子町役場にある犬養孝氏揮毫による歌碑である。太子町を流れる明日香川は、静かで清らかで、いつまでも見ていたい川だった。流れは小さくとも、そこにずっと流れ続けていることを歌は教えてくれる。万葉時代の人々は自分と同じように川縁に立ち、それぞれに季節毎の美しさを感じたのだろう。やはり川に、その場に來ることが大切なのだ。河原を歩いて、目で見て、手で触つて、風をうけ、匂いを感じ、鳥の声、せせらぎの音を聞き、季節の移ろいと来し方行く末を思う。こんな小さな自分でも、歴史の流れの一滴になっているのだろうか。ならばせめて流されず、自ら流れを選んでその一滴でありたい……。

掃除は終わった。気がつくると手の皮がむけている。滝のような汗もやりとげた感につながっている。丸付けも書類書きもあるけれど、秋からは子供たちと一緒に遊ぼう。一緒に語ろう。そして一緒に、季節を体で感じよう。

